

乳癌発生率大幅減

The New York Times ホームページより和訳

<http://www.nytimes.com/2006/12/15/health/15breast.html?ex=1323838800&en=11b491296982fe80&ei=5088&partner=rssnyt&emc=rss>

最も一般的な種類の乳癌の発生率が、2002年8月から2003年12月の間、驚くことに15%減少したと、昨日研究員により発表された。

その理由は、大掛かりな国家研究の結果、hormones(ホルモン)が乳癌発生率をわずかに上げているとわかったことから、その間多数の女性が menopause(閉経・更年期)のホルモン療法をしなかったためである、と彼らは考えている。

Houston の M. D. Anderson Cancer Center の研究員や、San Antonio の breast cancer conference で発表された、乳癌発生率の新しい分析は the National Cancer Institute の最近の癌発生率のレポートが基になっている。

調査員は慎重になっており、カナダやヨーロッパのデータなど他の研究からも結果の確証を得たいと考えている。また、今後数年間様子を観察する。

分析の筆者の一人、M.D. Anderson center の Dr. Peter Ravdin, a medical oncologist(腫瘍科医) は次のように述べている。"Epidemiology(疫学・流行病学)では因果関係を証明することは決してできない"。

しかし彼は、ホルモンの仮説はデータを完全に明白にしておき、彼や彼の研究仲間では他に説明のしようがない、とも述べている。

分析の代表調査員の一人、Donald Berry, cancer center の head of the division of quantitative science は、ホルモンの使用と発生率の低下の関連を"ショック"と呼ぶ。

全体に、全年齢の女性とすべての乳癌の種類発生率は、2003年に7%、つまり約14,000件減少したと研究者は発表した。このように大幅に乳癌発生率が減少したのは初めてのことで、特に、1945年から毎年徐々に発生率が上がっていたことを考えると非常に注目すべきことである、と言う専門家もいる。

乳癌の7割を占める、estrogen-positive tumors(エストロゲン陽性腫瘍)と呼ばれる腫瘍を持つ患者で減少率は目立っていた。

2002年7月、the Women's Health Initiative が、Wyeth 社の Prempro という menopause 薬品の使用の治験を大掛かりに行い、この薬品を使用していた女性はわずかに乳癌発生率が高かったことを発見した。この研究結果は多くの女性や医師にショックを与えた。それまで、Prempro は単純に若さのホルモンの代替だと考えられていた。その後6ヶ月でこの薬品の売り上げは半減した。

科学者たちはホルモンが、receptor(レセプタ・受容体)をエストロゲン細胞表面に運ぶ、エストロゲン陽性腫瘍の成長の糧になっていると考えている。女性が menopausal ホルモンの摂取を止めたとき、女性の胸の中に存在する小さな癌腫はエストロゲンを奪われ、成長が止まり、マンモグラフィで発見されるほどの段階にまで達しない、というのが彼らの仮説である。

他の癌も退行し、発見できなくなっているかもしれない。そして恐らく、ホルモンなしの場合、発病していたかもしれない癌が全く成長していないかもしれない。

Dr. Otis Brawley, director of the Georgia Cancer Center at Emory University は次のように述べている。「今年は癌の研究の年になるだろう。この結果はなぜ乳癌発生率は黒人女性よりも白人女性に多いのかを説明できるかもしれない。黒人は menopause ホルモンをあまり使わないのである。」

また、Dr. Brawley は、この結果はなぜ癌が黒人女性にはより致命的なのかを説明できるかもしれないとし、ホルモンのために起こった癌は自然に発生した癌よりも死亡率が低いかもしれない、とも言っている。

Wyeth 社の代表 Candace Steele は、eメールで次のようなメッセージを寄せた。「乳癌は複雑な疾患で、原因は不明だ。推論で声明を発表するのは、まったく不適當である。」

Dr. Berry は、全体的に見て最も効果が顕著だったのは、50歳から69歳までの女性であり、これは menopausal ホルモンを最も摂取していた年齢グループであると考え、このグループでは、エストロゲンに反応し成長する種類とそうでない種類を含め、乳癌発生率が12%減少した。

この新しい分析結果はカリフォルニアの別の研究からも支持されている。11月20日に発行された、the Journal of Clinical Oncology(腫瘍学)によると、2002年7月からカリフォルニア州ではもっと大幅な減少が見られ、それに相応するホルモン使用者の減少があった。

Dr. Berry の分析を、昨日の発表よりも前から知っていた別の研究員は、その仮説は説得力のあるものと言う。

the University of Pennsylvania 生物統計学教授 Susan Ellenberg は、研究は挑発的であると言う。「彼らの言うことは全くわからない。正しいとも思えないし、全く欠点があるともいえない。」

2002年まで、年齢が50歳を超えた女性の3分の1は menopausal ホルモンを摂取していた。この薬品は、のぼせなどの症状をやわらげ心臓病から守ると考えられていた。また、骨粗鬆症の予防に摂取していた女性もいた。そして、確かな確信があるわけでもなく、この薬品は肌を若々

しく保ち、記憶をよくし、活動的にさせると信じていた医師や女性もいた。

エストロゲンの menopause に対しての使用は、Robert Wilson 医師がベストセラー本、『Feminine Forever(女性らしさよ、永遠に)』を書き、販促のために国を飛び回っていた、1966年に始まった。彼はエストロゲンが女性の若さや健康、魅力を保つことができると主張し、糖尿病患者がインシュリンを使うように、女性は menopause で失ったホルモンを代替していた。

まもなく、menopause 剤、特にエストロゲンとプロゲステロンの混合である Wyeth 社の Prempro は歴史に残るほど人気のある薬品の一つとなった。

しかし 2002 年 7 月、the Women's Health Initiative の発表により、成功から転落する。the Women's Health Initiative が集めたデータから、Prempro が乳癌や心臓発作(heart attack)、発作(strokes)、血餅(blood clots)の発生率のわずかな上昇と関係があることがわかった。この薬品は股関節骨折(hip fracture)や、結腸癌(colon cancer)の発生をわずかに低下させていたが、これらの利点は、その他の危険性をカバーできるほどのものではないと研究者は言っている。Health authorities は、安全性が証明できない限り、似た薬品にも Prempro と同じような危険性があると警告している。

翻訳:株式会社 総見
国際マーケティング部